

# 堆錦加飾の簡素化に関する研究

担当 糸数 政次

琉球漆器の加飾は 80%堆錦加飾が主である。現在、企業では加飾職人の高齢化が進んでおり、さらに人員削減の影響もあり若手職人の育成が行われていない状況にあり、今後、精巧な堆錦加飾を行う技術者が途絶える可能性がある。そこで、圧縮成形による漆器素地製作方法を応用し熟練加飾職人ではない若手職人でもできるように加飾技術の簡素化を図る。さらに、堆錦加飾工程が容易にできるように技術開発を行うことで雇用拡大を図る。

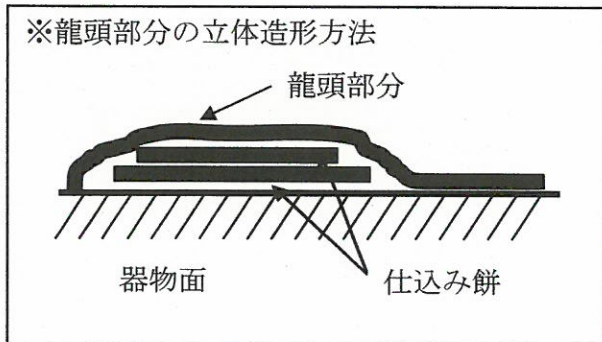
## 1. はじめに

自然塗料などの安全な天然素材への関心が高まっている中で、漆器業界は新商品開発の遅れで低迷している状況である。業界の活性化を図るには、本物志向に移行して地産地消で県民が使用してくれる漆器を広めていく必要がある。今回の試験研究は、精巧に加飾された堆錦を緻密に型取りできる素材の選定。堆錦餅の型押し成形、形抜きが容易にできる堆錦餅の製作。開発した技術による試作品製作を行い、企業に技術移転し木漆工業界の新たな需用開拓および、雇用拡大を図ることを目標に実施した。

## 2. 試験内容

- 圧縮成形型の選定で堆錦加飾文様の形抜きが良い素材の検討試験。
- 堆錦餅の固い、柔らかいによって、型押し成形、形抜きが容易にできるかの検討試験。
- シリコン型による錆絵技法の試験。

### ■試験体と製造工程



図一 1

試験体は、熟練職人による堆錦加飾を使用した。写真一 1 の龍頭部分が熟練を要する箇所である。龍の加飾模様大きさによって、仕込み



写真一 1

堆錦餅の枚数も変わる。弁柄餅を使用して松煙で着色し黒一色で仕上げた作品である。熟練職人による堆錦加飾工程は以下のとおりである。

- 1) 堆錦餅を電動ローラー、電動ハンマーで焼漆と顔料を混練りして新餅を製作する。新餅と古餅を混ぜて文様製作しやすい固めの餅にする。
- 2) 手動ローラーで堆錦餅を薄く延ばす。接着剤の焼漆を薄く塗り、化粧合板に堆錦餅を貼り付ける。
- 3) 顔料を水で溶いたもので置目を行い、文様に切り取る。文様以外の餅は取り除く。
- 4) 文様に棒金で凹凸をつけ立体的な表面にし、龍頭は図一 1 のように成形し、着色して仕上げる。
- 5) 化粧合板上で仕上げた堆錦文様を剥ぎ取り、漆器面に貼り付ける。パラフィン紙を被せ上から綿タンポにて擦りつけ定着させる。完成までに 6 時間かかっている。



## ■型の作り方

### ○シリコン型

試験体に、型取り用シリコーン RTV ゴム (KE-12、KE-17) を薄く 3 回流し込み型取りを行った。型の強度を持たせるために寒冷紗を張った。外型は石膏を流し込みシリコン型を仕上げた。

### ○石膏型

試験体に、歯科用超硬質石膏 (ニューダイヤモンド) を流し込み石膏型を仕上げた。

## ■ 堆錦加飾模様の型取り試験

○堆錦餅は、スグロメ漆を焼いた焼漆 3 にスグロメ漆 1 を混合した漆に、顔料の弁柄に混合比 (弁柄 7 : 漆 3) の割合で作成した新餅。新餅と古餅を 1 対 1 で混ぜた固めの堆錦餅。

○堆錦餅を薄く延ばし型に押し込む。龍頭部分は、凹み部分が埋まるまで堆錦餅を充填させ、型の文様部分が平らになるように押し込む。

○押し込んだ文様部分に、接着剤の焼漆を塗る。塗った後、写真一 2 のように化粧合板に加飾文様を貼り付け、シリコン型を抜き取る。

○石膏型は、型が硬いので文様部分に焼漆を塗った後、プラスチック板に文様を貼り付け型から抜き取る。

○貼り付けた後、堆錦加飾模様以外の堆錦餅を堆錦刀で除去する。



写真一 2 (弁柄餅)

## ■シリコン型による鏝絵技法の試験

○ニービ下地 (小緑砂岩を #200 に篩い分け水練りして生漆と混ぜたもの) を龍頭部分以外にヘラ付けを行い、龍頭は絵筆を用いて 3 回

に分けて下地を充填する。乾燥後、鏝付けを行う。

○下地が乾燥した後、シリコン型から龍文様の鏝絵を型抜きして、文様からはみ出した下地を取り除く。接着剤として焼漆を薄く塗りシナ合板に写真一 3 のように貼り付けた。



写真一 3 (鏝絵)

## 3. 結果

○シリコン型は、軟らかい堆錦餅の方が試験体に忠実な文様の型抜きができた。

○石膏型は、固めの堆錦餅の方が良い。

○熟練職人による製作時間より、三分の一に短縮することができた。

○型抜きが良い。そのために、若手職人でも容易にできることが可能である。

○図一 1 のように仕上げる堆錦加飾には有効な方法である。

○精緻で重厚な龍文様などの製作時間の短縮により、コスト削減を図ることで新たな需要開拓が図られる

○鏝絵に関しても形抜きがよく、充分に加飾技術方法として可能である。琉球漆器の新たな加飾技法としての可能性がある。

## 4. まとめ

今後、さらに課題や改善点を検討し地域ブランド性の高い製品、木工業界とのコラボレーションによる商品開発など、新たな取り組みへと波及していくことで木漆工業界の活性化が図られるので、次年度には今回できなかった試作品の提案を行っていくことにする。